

研究ノート

『読書人』の戦後

——「書評誌『読書人』の国内思想戦」補遺——

植村和秀

はじめに

第1章 1951年度前半の『読書人』

第2章 1951年度後半の『読書人』

おわりに

はじめに

『読書人』は、1941年12月に創刊され1944年にひとまず終刊した書評誌である。発行元の東京堂は大手の取次業者であり、その強みを活かして1914年に『新刊図書雑誌月報』を創刊していた。同誌は1927年に『東京堂月報』と改題され、1932年5月からは「読書人の雑誌」という副題を付して一般読者向けの月刊雑誌となっている。(植村(1):2)

『東京堂の85年』には、「取次業時代に営業機関誌として発足した「東京堂月報」は次第に内容を改善し、取引先書店よりも一般読書界から歓迎されるようになり、副題を付してからは「一層巻頭記事の充実に努めたので、月極め読者は全国的に増加して来た」との記述がある。(東京堂85:402)

拙稿「書評誌『読書人』の国内思想戦——1940年代前半日本の言論空間研究」では、この『東京堂月報』を終刊にして創刊された『読書人』誌が、当時の言論環境に適応し、さらには過剰適応して国内思想戦を遂行していく過程を追跡した。その背景には、出版新体制という国家統制によって、主軸たる取次業を強制的に廃業させられた東京堂の経営事情がある。

この統制下での出版事業には、一時期の好況の恩恵があった一方で、検閲の危険の増大と、大規模な企業整理や雑誌整理という危機が押し寄せていた。戦況の悪化は言論環境をますます悪化させ、言論空間は縮小の一端を辿って荒んでいく。国内思想戦を呼号する人びとは、自己の敵を政治的に排除することに必死となり、『読書人』誌はその人びとに誌面を提供した。縮小する言論空間では競争相手を空間の外に押し出しやすく、また逆に、自分も押し出されやすくなる。執筆者として、あるいは雑誌編集者として、空間内に残る競争に勝とうとする意欲が、国内思想戦を駆動させたように思われてならないのである。

さて、終戦後の東京堂では1945年12月に出版部の営業が再開されている。(東京堂85:422)その後、出版部長の増山新一が1949年1月に取締役役に就任し、戦後も引き続き出版事業に尽力することとなる。増山は1914年の入社であり、『新刊図書雑誌月報』以来の編集事情を知る重鎮であった。(東京堂85:577)政府に取り上げられた取次業務が戦後に戻ってくるということもなく、出版部は小売部とともに東京堂を支え続けていくのである。

第1章 1951年度前半の『読書人』

『読書人』の復刊第1号は、1951年4月の刊行である。編集発行人は増山新一、定価は35円である。誌面の体裁は戦前に類似しているものの、表紙は単色の色鮮やかなものとなっている。

本号では50頁中25頁が「東京堂編纂新刊分類目録」であり、同年2月刊行の書籍が内容説明付で紹介されている。目録の形式は戦前の『東京堂月報』、『読書人』を基本的に引き継いでおり、編集部名の説明文も従来とほぼ変更がない。そこでは、この目録が「総て本社にて現品調査によって編纂」され、「簡単ながら内容紹介まで掲げた他誌に見られぬ本誌独特のもの」であり、1914(大正3)年以来努力を重ねてきたと力説されている。(1:25)なお、内容紹介は戦前は最大39字、戦後は40字という簡明なも

のである。また、従来と同様に目録の最後には月単位の新刊書統計が集計されており、出版史にとっての貴重な資料ともなっている。(1:50)

「復刊に際して」と題した編集後記には、「あくまで出版界全体のための公的な存在として偏することなき編集方針を堅持してゆく」とあり、「読者諸賢にも「東京堂月報」以来の変らぬ御支援を、心からお願いする次第である」と記されている。(1:50) ここには、出版界の志士として国内思想戦の敢行に全力を尽くすとした戦前『読書人』誌の編集方針への言及はまったく無い。公的な存在として偏することなく国内思想戦を遂行してきたとの自負があるのか、本当にすべて無かったことにしようとしているのかは、判断ができない。いずれにせよ、編集後記で強調されているのは、半世紀ほど前から努力を重ねてきた新刊目録の意義である。

「『読書人』はいつから出るか。1日も早く復刊せよ。という声が昨年あたりから急に強くなった。もっとも書店本位の業界雑誌や、特定出版社の機関誌はいくつも出て居り、読書新聞は健全に発展しているが、さて1ヶ月の新刊書をまとめて綜観し、出版物の大勢を一目で見ることのできるものは、今日まで1冊も見当らない。人々が昔なじみの「読書人」を思い出され、再刊を要望されるには、それだけの理由があったのである」。(1:50)

こうして『読書人』は復刊された。特に巻頭言もなく再刊された『読書人』の冒頭には、慶應義塾元塾長である小泉信三の「系統的書評」が掲載されている。小泉は、E・H・カーが1950年に刊行した『革命の研究』が、タイムズ文芸付録に掲載した書評の集成であることを指摘し、書評対象を系統的に選択して書評の学術的価値を高めるべきであると呼びかけている。(1:2) なお、同書の日本語訳は社会思想研究会出版部から1952年に刊行されている。

小泉に続いて数学者の小倉金之助が「何を読むべきか」を論じている。小倉は、オストヴァルトの『偉人伝』やトルストイの『芸術論』、ルソーの『エミール』のような「独断や誤謬にみちていても、究極において正しく立派な書物」を青年諸君はまず読んで、反発しつつ自ら考えていくのが

良いのではないかと提案する。(1:3) この頃の小倉は日本科学史学会会長である。

読書論に続くのは思い出話である。1955年に『広辞苑』を刊行する新村出は「日本のカルチュア・センター」である神田神保町界隈、哲学者・美術史家の矢崎美盛はベルリンの「ヘラースベルグ書店」、英文学者の福原麟太郎は東京堂も含めた「東京の本屋」の思い出をそれぞれ記している。

この後は佐藤朔による「最近のフランス文学」の紹介、坂西志保の随筆「読書の態度」、本多顕彰の随筆「英国の読書論」、龍口直太郎による読書案内「現代アメリカ文学の構図」である。本多は2月に『ぼくらの西洋文学史』を東京堂から刊行したばかりである。佐藤と龍口の読書案内は「現代世界文学の展望」と目次に記載されており、これらとは別に日本での「アンドレ・ジイドに関する最近の雑誌・新聞記事」の一覧が、ほぼ1頁を用いて掲載されている。(1:24)

目次では「新刊論評」と題して、以下の4篇がまとめられている。宇野弘蔵による「シュンペーターとスウィージー」の著作への批判的論評、嘉治隆一による「同時代史・原田日記・原敬日記」の紹介、菅井準一による「原子力科学の諸書」の紹介、古谷綱武による「児童図書紹介」である。これらは基本的に良書の紹介であり、批判的な場合にも建設的な論評となっている。以前の国内思想戦時のような、悪書を弾劾し、その精神を否定する論調はない。分野としては文学が多く、経済、現代史、科学、児童読物がそこに組み合わさっている。

分野単位での新著月評欄は、1941年9月刊行の『東京堂月報』第28巻第9号に始まり、『読書人』にも継承された特色的な企画であった。本号に明記はされていないものの、戦前の同欄の雰囲気に近いものとなっている。なお、古谷は『東京堂月報』同号と次の最終号で児童読物を担当し、菅井は最終号から1943年3月刊行の『読書人』第3巻第3号まで、ほぼ3回に2回は科学を担当していた。

第2号は5月刊行であり、52頁中31頁が新刊分類目録である。長谷川如是閑の随筆「個性的創造のために——私の読書法」を巻頭に、元駐ド

イツ大使の武者小路公共の思い出話「読書さまざま (1) —— 欧州拾いばなし」、福島慶子の随筆「花見酒」が並ぶ。どれも軽い筆致である。なお、長谷川如是閑の執筆は1942年2月刊行の『読書人』第2巻第2号以来である。同号の「日本文化の基礎的条件」で如是閑は、戦時に科学文化の重要性を力説していた。(2-2:5) それと比べれば軽い随想である。

これらに続き現代世界文学の展望として、中橋一夫の「現代イギリス文学展望」、原田義人の「20世紀のドイツ文学」がある。いずれも目配りの利いた丁寧な紹介である。この後、世界の読書論として本多顕彰の随筆「英国の読書論 (2)」があり、渋谷秀雄の回想「現代随筆家交遊録」と続く。新刊論評は、福武直の「社会科学と社会思想 —— 2つの講座について」、宮原誠一の「綴方教育の新刊書」、古谷綱武の「児童図書紹介 (2)」である。古谷の論評には「学校図書館のために」との表記も頁右上に付いている。なお、中橋、原田、福武、宮原は東京大学の教員である。また、本号には日本での「マチス展に関する記事」の一覧が半頁ほどを用いて掲載されている。(2:18)

第2号の編集後記には、「第1号は少し堅いという声に答えた」とあり、あえて軽い内容にしたとのことである。新刊論評は社会科学と教育、児童の分野であり、「将来当然この欄は拡張したいと思う」とある。(2:52) また、3月の新刊書籍数は740点あり、東京堂月報時代の最高数と記憶する約640点をはるかに超えていて驚かされたとも指摘されている。(2:52) 編集後記欄の執筆者は戦前から東京堂に勤務している人物ということであろう。増山であろうか。

さて、本号にも国内思想戦の名残りを見出すことはできない。落ち着いた書評誌である。それはまた、マルクス主義的な雰囲気も感じられず、政治的な運動とのつながりも見出せないということでもある。他方、その落ち着きが活気を生み出すというわけでもなく、小冊子として魅力的であるとは正直言い難い。新刊目録を購入すると少し付録がついてくる感じである。

第3号は6月刊行であり、52頁中30頁が新刊分類目録である。巻頭に

は大類伸の随想「みどり」があり、次いで小堀杏奴の「読書その他」となる。その後、加藤周一の「戦争文学」論があり、大岡昇平の『野火』を力強く論じている。加藤は、大岡の小説が戦場の人間を描き、極限の感覚を体感させてくれると評価する。(3:4-5) この論考は、内容的にはむしろ巻頭に置くべきものであろう。

続いて須田国太郎の「挿画」論、武者小路公共の「読書さまざま(2)——欧州拾いばなし」、石川欣一の「ベスト・セラア」論、並河亮によるアプトン・シンクレアの解説である。シンクレアはアメリカの小説家、社会主義者である。新刊論評として、吉田健一の「新しい文学書」、戸川行男の臨床心理学の紹介、古谷綱武の「児童図書紹介(3)」がある。吉田は特に、中野好夫、中村眞一郎、加藤周一の近刊を推奨している。(3:14-15) 編集後記には、売れない新刊がすぐに返品される現状を踏まえて、目録の活用が呼びかけられている。(3:51)

第4号は7月刊行であり、52頁中31頁が新刊分類目録である。巻頭には中谷宇吉郎の「千年の時差」があり、折口信夫の『死者の書』と小林秀雄の『真贋』を特に推奨している。中谷は、「理性以前の人のところを描く」ことに『死者の書』が成功したのは、小説の形式に見えて実は1つの長詩だからではないかと、折口の個性の奥深い所にまで目を届かせている。(4:2) 中谷は1944年3月刊行の『読書人』第4巻第3号では、地理学者の室賀信夫によって、日本の後進性を想定する姿勢に疑問を呈されていた。(4-3:18) 国内思想戦時代の『読書人』にとっては、敵側の人間だったはずである。

続いて吉川幸次郎の北京の思い出話「来薰閣琴書店」、武者小路公共の「読書さまざま(3)——欧州拾いばなし」である。現代世界文学の展望は、除村吉太郎の「現代ソヴェト文学について」と魚返善雄の「現代中国文学と日本人」である。除村は、ソ連国内の敵対的階級の消失に伴って文学の創作方法が社会主義リアリズムに統一されたと解説する。(4:7) 「社会の正しい進展をさまたげるものはただ古い人々の頭脳のなかの古い観念と資本主義諸国からの悪影響のみ」となり、1932年頃には社会主義的人間の

教育という課題が明確になった、とするのである。(4：7-8)魚返善雄は、「中国は文化地図の上ではアメリカやヨーロッパより遠方にあるような現状」を踏まえて、中国の作家の多様な活動を丁寧で紹介している。(4：10)

新刊論評の最初は、高桑純夫の「最近哲学界の動き」である。高桑は、「歴史を動かす大衆の、語られざる苦悩や願望にたいして、誠実な相談相手となってやっているかどうか」に哲学の意義は存すると指摘し、唯物論者も含めて、平和の問題に実質のある取り組みをするよう希望している。(4：14-15) 続く井上幸治の「世界史にふれて」、瀧口修造の「美術書の問題」、古谷綱武の「児童図書紹介(4)」は、いずれも穏当な新刊紹介である。

編集後記には、古谷の紹介が「学校図書館方面から大変好評を博している」とあり、また、「本が売れない売れないと言いながら、実によく新刊が出る」との指摘がある。(4：52)

第5号は8月刊行であり、52頁中新刊分類目録は17頁に止まっている。特に充実した内容となっており、気合いの入った号である。なお、用紙値上げなどのため定価を40円に値上げしている。(5：34)

巻頭は戒能通孝の「芸術と法律」である。チャタレー事件を論じる戒能は、小売店からの書籍の大量押収という警察の捜査方法が過剰であり、今後には有害な影響を及ぼすとの懸念を表明している。(5：2-3)

その後は、井島勉の美術書論評、片山敏彦のロマン・ロラン論、国立国会図書館副館長の中井正一による「集団文化と読書」である。中井は、図書館のネットワークをきわめて好意的に紹介し、図書「網と、新聞と、販売網でクエストチャンネルの計画性をもつならば、マッス・コミュニケーションとしての読書心理の研究が可能であり、このときはじめて科学的な、出版企画が、成立する」と力説している。(5：6) ただしこれだけでは、「科学的な、出版企画」の主意か何であるかはよく分からない。

続いて幸田成友の思い出話「三馬の机と日記」、江戸川乱歩の探偵小説論「異様な動機」、春山行夫の「世界各国の百科全書」紹介、藤木九三の山「岳書ロマンス」、串田孫一の「星への恋情」である。いずれも気軽に読むことのできる文章である。なお、頁下の広告に東京堂刊行の少年小説

翻訳書『TVAの少年』の広告がある。『ワールド・シリーズ』、『リンカーンの町』とともに、著者はジョン・R・テュニス、訳者は下島連である。(5:22)

下島は『読書人』の国内思想戦に際して、京都学派を激しく弾劾した編集者である。「皇国の大道に対する絶対の信」(3-7:48)を説く下島は、『文藝春秋』退社後は『文藝日本』の編集を行っており、国内思想戦の熱烈な担い手であった。1985年刊行の著書によれば、下島は戦後の数年は「英書の翻訳」を行ない、1955年からアメリカ大使館に勤務して『アメリカーナ』誌の編集長などを務めた。(下島:197)ちなみに下島は、京都帝国大学文学部英文科の卒業である。東京堂からは1949年12月に『サッカー童話集』の翻訳を刊行しており、出版部との関係は戦後も続いていたようである。

新刊論評では、科学を矢島祐利、国文学を吉田精一、法律を中村吉三郎、音楽を山根銀二、児童を古谷綱武が担当している。『読書人』の初期を思い出させるような充実した近刊紹介となっており、本号でようやく、初期の書評の水準に戻った感がある。

第6号は9月刊行であり、52頁中31頁が新刊分類目録という構成に戻っている。編集後記には、新刊本が異様に多いが決して好況ではなく、他方、学術研究書出版がますます困難になっているとの説明がある。(6:52)いずれも出版事業についての深刻な危機感の表明である。

巻頭は馬場恒吾の思い出話「読書の一生」、続いて呉茂一の「読書余録——ギリシア人とわれわれ」である。この後の中山伊知郎「学術書出版の危機」は、「出版界の不況と危機」の中での対応を論じている。(6:7)これに続いて高橋義孝の「末世の読書子」、欧米出版界の近況を伝える「海鳥通信」である。「海鳥通信」は1942年1月刊行の『読書人』第2巻第1号以来の復活である。

新刊論評は、教育を宮坂哲文、科学を山崎文男と湯浅明、統計を佐藤良一郎、児童を古谷綱武が担当している。宮坂は勝部真長の『道徳教育』を取り上げ、戦後の社会科の基本は戦前の修身とは異なって理性にあるとの

認識に賛同しつつ、道徳教育が別に必要であるとの勝部の主張に反対する。(6:12-13) 宮坂は、「科学的な生長」を通じての「新しいモラル」の育成を目指すべきと主張し、「私は、たとえ道徳教育とは民主主義の道徳教育のことだといってみたところで、社会科の起点が科学から道徳にすりかえられるということであれば反対だ」と記すのである。(6:13) 読んで啓発される書評である。

山崎は放射性生物学・医学、湯浅は遺伝学、佐藤は数理統計学の近刊書を紹介している。専門的な内容ではあるものの、知的好奇心の強い読者であれば興味深く感じたことであろう。ただ、今号の思い出話や随想も、総じて特別の魅力を感じさせるものではない。第1号以来、大人しい印象の短文が巻頭に掲載されており、新刊目録の付録のような短文という印象に変わりはない。

第2章 1951年度後半の『読書人』

第7号は10月刊行であり、52頁中29頁が新刊分類目録である。本号でようやく特集が巻頭に組まれている。特集「読書界の現状考察」である。

特集の最初は大河内一男の「出版危機の意味するもの」である。大河内は、出版界の「底なしの不況」は「中間知識層」の経済的没落と「出版資本」の非「産業資本」的な性格から考えられるべき問題であると説いている。(7:1-2) 続く市原豊太は「或る統計からの読者層」で、東大図書館の貸出図書の統計を紹介している。(7:3-4)

この後は中島健蔵の「講和後のジャーナリズム」である。ここで中島は、「昭和10年代から戦争にかけての醜態」を繰り返してはならないと力説する。(7:5)

「われわれは、どうしても、あの当時の苦い思い出を消すことができない。編集者の一部は、憲兵隊や情報局や、陸海軍報道部の圧力によって、ひどい目にあい、他の大部分は、むしろ進んでそれに追従した。そして、不幸な「国論」の一体化に手を貸し、はなはだしきに至っては、リベラリスト

までこめて、多くの執筆者をボイコットし、さらに進んでは、誌上で彼らを告発するに至ったのであった。(7:5)

こう述べる中島は、「かつて弾圧にあった人間が、戦後自由の前衛になっているとは限らない」とも指摘し、単純な善悪の問題ではないとする。(7:5)「主張をもち、方針を確立している編集責任者が、しっかりと腰をすえて活動」し、面従腹背にも独善にも陥らないことを中島はジャーナリズムに希望するのである。(7:6)

それにしても、国内思想戦に熱心に取り組んだ戦前の『読書人』誌について、中島はどのように考え、編集部はどのように考えていたのであろうか。なお、1942年に徴用作家としてシンガポールへ派遣された際、中島が陸軍に協力して積極的に日本語教育を推進していたとの証言があることについては、若木奈津美による研究がある。(若木:164-166)

特集の最後は阿部静枝の「地方の読書分析」である。阿部は読書状況を具体的に紹介し、「文化財として買入れたのを一家中がよむ、読書会を利用する、学校や公民館の図書室や、読書家の書棚から借覧」するのが一般的であると指摘している。(7:7)

編集後記では、経済学的分析、「若い青年」の読書分析、ジャーナリズムへの警告、地方の読書層の分析によって特集を構成したと記している。(7:52) この後は小汀^{おぼま}利得の「若き頃」、鈴木信太郎の「本から立昇る思出」、海鳥通信である。

新刊論評は、経済が神野璋一郎、詩歌が北川冬彦、文学が佐々木基一である。神野は「世界資本主義の全般的危機」を主張し、現状をごく表面的に、東西ヨーロッパにおける人民民主主義体制と資本主義体制の対立と捉えている。(7:14)「詩書から見た現代詩の問題」で北川は、大正末期に明治以来の日本の詩が「面目を一新した」とし、昭和期の現代詩の難解さは時代の難解さでもあると指摘する。(7:16-17) その上で、「荒地」グループや「時間」のネオ・リアリズムの新展開を紹介し、現代詩の方向性と多様性を丁寧に示している。(7:17-18)

佐々木は、「最近の文芸評論」を論じて小林秀雄の人気の高まりに言及し、

小林の議論が持つ断絶感の魅力を強調している。

「戦争中もそうであったが、小林熱が一般に高まるときは、文学の病弊がよほど深刻化したときであり、まずその逆反映であるとして差支えない。病み衰えた白々しい小説の氾濫に代表される現代文学の墮落への流れからの断絶——、要するにその果敢な切断の覚悟に小林の魅力の大半がかかっている」。 (7:19)

ただ、それでは「雲の上に逃げて行く方向」になってしまおうとして、佐々木は、寺田透の文芸評論に理解へのたゆまぬ努力を見出し、あわせて紹介している。(7:19)

この後には古谷綱武の「児童図書紹介(7)」があり、それまでの頁の空き部分には、深瀬基寛の「英国思想界の新刊2つ」、小川徹「『世界地理体系』を読んで」が組み込まれている。編集後記には、「この欄を充実させたいにつけ、頁数の不足を残念に思う」とある。(7:52) 第5号の編集後記には、当初予定の42頁を「意外に多い新刊数で毎号増頁している」とあり、これ以上の増頁は難しいようである。(5:34)

第8号は11月刊行であり、50頁中29頁が新刊分類目録である。巻頭は土岐善麿の「読書余記」、次いで蠟山政道の「国際認識の資料と方法——新聞報道の読みとり方」である。蠟山は、講和後の日本に必要なのは「国際情勢の科学的認識」であるとし、国際政治と比較政治の研究を活性化させていくべきと主張する。(8:5) たださしあたっては、外国の新聞や雑誌をその宣伝的性格も踏まえて読む、あるいは、欧米の優れた政治家の政治演説を読む、というのが蠟山の推奨する方法であった。(8:5)

続いて「現代著作家ノート」と題して、カミュを窪田啓作、スタインベックを西川正身が担当し、簡明な紹介を行なっている。また、高桑純夫による本田喜代治著『社会思想史』への短評、望月衛によるフロイト学派の翻訳書の紹介、海鳥通信もある。新刊論評は、森末義彰が歴史、井沢淳が映画、番匠谷英一が演劇を担当し、古谷綱武の「児童図書紹介(8)」となる。

森末は、1943年6月刊行の『読書人』第3巻第6号、同年10月刊行の第10号でも歴史欄を担当していた。「この大東亜戦争こそ、正しい国史の

体認の上に立つ日本世界観が、世界を光被する第一歩を形づくることを意味する」と力説する森末は、平田俊春の『吉野時代の研究』の学術的意義を丁寧に紹介している。(3-6：18-19) 平田は、平泉澄門下の国史家である。また、「史書の性格は、その著者の思想的立場、すなはち著者の抱懐する歴史観」に規定されるとし、日本人が書く歴史は「皇国史観に立脚する日本的性格」を持つものでなければならぬとして、小林元の『歴史眼』を特に推奨する。(3-10：41-42) 小林は、回教圏の研究者である。ただし、いずれも『読書人』誌が国内思想戦に熱烈に取り組んだ号であるものの、森末は悪書を弾劾してはいない。思想的にも学術的にも良書としたものを紹介するのみである。

さて、本号の論評では特に思想的な論及はない。1952年度から検定済教科書が使用予定という事情もあって「日本史の概説書と史料集」が続々と刊行されている、という紹介である。(8：12-13) なお、森末は戦前も戦後も、東京帝国大学・東京大学の資料編纂所勤務である。

第9号は終刊号である。12月刊行であり、48頁中27頁が新刊分類目録である。編集後記には、「最近漸く本誌も軌道にのった感があり、その声価も高まって来た」矢先に申し訳ないとしつつも、突然ながら休刊にさせていただくとの告知がある。(9：48)

「目録事業の困難はすでに承知の筈であったが、実物による調査事務は想像以上に繁雑をきわめ、なかなか一書店の犠牲としては無理があり、やはり取次業者のやるべき仕事だという感を深くした。手を抜くことはやさしいが、それなれば他に類似のものが沢山あり、質を落して続刊する気にはなれない。残念ではあるが、一先ず休刊することに意を決した」。(9：48)

ここで突然の休刊とあるように、特に何か、休刊を踏まえた原稿が本号に掲載されているわけではない。巻頭は上原専禄の「ドイツ新刊書管見」である。上原は、日本の出版業界が1946年から48年の好況を経て48年末頃から不況に陥ったのに対し、西ドイツではむしろ48年下半年頃から出版が活発となり、50年、51年になると戦前に劣らない良書が出版され

ていると指摘する。(9:1-2) 上原は、1950年から定期刊行されている小冊子『ドイツ書』に西ドイツの新刊書が分野別に掲載されていることを紹介しつつ、学術的に水準の高い書籍や雑誌が続々と刊行されている状況を「ドイツ文化の厚み、ドイツ社会の堅さ」と捉え、日本との違いに注意を促している。(9:2-3) ちなみに、この『ドイツ書』とは、フランクフルト・アム・マインに戦後設立されたドイツ図書館が編纂した新刊書抜粋目録 Das Deutsche Buch のことであろう。

上原の頁の余白には、信夫清三郎著『大正政治史』が物足りないとする久野収の批判的紹介、上原に続いては西村孝次による「文庫本について」がある。現代作家ノートとしては、石上良平がラスキ、宮崎義一がケインズを担当している。石上は、ラスキが学者であると同時に政治家であったことに注意を促し、共産主義に関する発言の「政治的な要素」を強調している。(9:7) 他方、宮崎はケインズの経済理論と実践的提案の結び付きを強調し、その生涯への理解の必要性を説いている。(9:7-8) いずれも優れた解説である。

この後は杉本喬による『研究者新英米文学語学講座』の推奨文、海鳥通信と続き、新刊論評は岡田温の図書館、扇谷正造の随筆、白井俊明の科学、古谷綱武の「児童図書紹介(9)」である。古谷ただ一人が、復刊から休刊までの全号に執筆したことになる。

こうして書評誌『読書人』は休刊した。9号の編集後記に述べられた再刊の希望は、ついに実現することがなかった。『東京堂の85年』は、復刊号は好評であったものの、「目録雑誌を買うよりも、文庫本の1冊でも余計に求めようとする人が多」い経済状況であり、しかも新刊の蒐集は取次時代と比べて難しく、書評雑誌の「経営上一番大事な入広告が集まらなかった」と回顧している。(東京堂85:457) 『読書人』の復刊は「時期尚早であり、力足らずであった」というのが同書の総括であり、その執筆者は増山であった。(東京堂85:457, 593-594)

戦前の『読書人』は、言論環境に適応して科学振興の旗を振り、言論環境に適応、あるいは過剰適応して国内思想戦の旗を振った。敗戦後は、戦

犯出版社を弾劾する活動が戦時の国内思想戦のように行なわれたり、出版事業の経営環境が悪化していったりと、出版界全体の言論環境は次々と変化していった。その中で『読書人』を復刊させた背景には、『読書人』時代よりもむしろ『東京堂月報』時代の雰囲気を取り戻したい心情が働いていたのかもしれない。

それでは、『読書人』という誌名はこれで消えたのであろうか。1957年2月に日本書籍出版協会が結成され、関係者が機関紙発行を検討した際、「文芸春秋の池島信平と、朝日の扇谷正造は、口をそろえて題号は「読書人」に限る。これ以上適切なものはない」と主張したと『東京堂の85年』は伝えている。(東京堂85:458) まもなく東京堂との間で交渉が行なわれ、題号は円満に日本書籍出版協会へと譲渡された。『週刊読書人』の誕生である。

1958年5月に創刊された『週刊読書人』は、東京堂発行の『読書人』とは完全に別の雑誌である。ちなみに、日本書籍出版協会会長下中弥三郎から東京堂取締役社長大橋勇夫に宛てた文書には、協会発行の書評新聞の題号を『週刊読書人』とすることに快諾を得た感謝と、第三者への譲渡をしない旨の記載がある。(東京堂85:458) 新しい言論環境の中で、新刊の『週刊読書人』は独特の存在感を発揮するようになっていくのである。

おわりに

編集者の井出彰は1960年頃を回顧して「書評3紙鼎立時代」と呼び、具体的な誌名として『日本読書新聞』、『図書新聞』、『週刊読書人』を挙げている。(井出:52) この3誌の関係を整理した編集者の宮守正雄によれば、『日本読書新聞』は戦時期に出版を統制した日本出版文化協会、日本出版会、戦後はその事実上の後継組織である社団法人日本出版協会の機関紙であり、1949年創刊の『図書新聞』は、この『日本読書新聞』を辞した田所太郎元編集室長を中心とするものであった。(宮守:15-32)「公平で自由な書評」を目指す田所が、協会の戦犯出版社弾劾活動に嫌気がさして転出したので

はないか、と宮守は推測している。(宮守：29) これに対して『週刊読書人』は、糾弾された出版社が結成した日本自由出版協会が全国出版協会を経て発展した日本書籍出版協会の機関紙として構想されたものであり、当初は合流予定であった『日本読書新聞』が存続を決した結果、3紙鼎立となったのである。(植田：46-51, 宮守：32-34, 井出：50-54)

編集者の植田康夫によれば、「60年安保から学生運動が盛んだった1970年ぐらいまで」は書評誌の全盛時代であり、「明らかに学生読者が中心だという時代」があった。(植田：127) 左翼や文学が輝いていた時代の雰囲気の中で、書評誌は独特の魅力を発揮していたのであろう。なお井出は、「たまり場的機能としての書評紙」という特徴を『日本読書新聞』と『図書新聞』に指摘している。(井出：30)

ただ、政治と文学が盛り上がった時代が過ぎて、書評誌はどうなったであろうか。日本での書評の衰えを指摘する井出は、「書評文化の不在」の背景に雑誌が主流の出版市場があり、書籍が出版業界を支える欧米との相違があるとする。(井出：158-162) 他方、『週刊読書人』に在籍した植田も、雑誌が主である日本の出版業界では、欧米のように「書評も評論の一分野として確立」しなかったのではないかと指摘している。(植田：170)

植田にインタビューした評論家の小田光雄も、現在では「雑誌メディアが有していた書評機能というものもやせ細り、雑誌書評と書籍の連関性も失われてしまった」とし、ほとんどの本が「オーソドックスに書評されずに終わってしまい、そのまま埋もれてしまった」と指摘している。(植田：169, 171) 小田はまた、戦前では『東京堂月報』が「書評紙の代わりを務めた」ものの、その内容は本の紹介に重点が置かれていて、「書評の役割はほとんど果たしていない」ともしている。(植田：171)

この対話の中で植田は、『週刊読書人』創刊号に掲載された佐藤春夫の論考に言及し、「まさにそのとおりだったことになるのかな」としている。(植田：171) 創刊号の一面に掲載されたのは、「批評のない国——現代の書評とジャーナリズム」であった。佐藤は、本当の書評は「読者の批評精神を刺戟」して、「読者自身をしてその問題を考えさせる」参考となるも

のであると主張し、これに対して日本の書評では、「コマーシャルイズムと、ジャーナリズムに支配された上に社交的おごなりが横行している」と批判するのである。(佐藤 25：293-294)

ところで、佐藤は1943年10月刊行の『読書人』第3巻第10号で、座談会「文学を語る——佐藤春夫氏を囲みて」に参加していた。政治と文学に熱心な人々が、『読書人』誌に頻繁に執筆し、国内思想戦の遂行の主役となっていた時期である。自らに敬意を表する参加者たちに囲まれながら、佐藤は、『読書人』誌の書評をどのように考えていたのだろうか。そこには、悪書を一方的に弾劾し他者を根本的に否定せんとする意欲があふれ出ているのである。

日本での「批評」不在の背景には、出版界の事情に加えて、他者の否定に傾斜する言論の特徴もあったように思われる。そのような言論を、はたして批評や批判と呼ぶべきかどうかは、改めて問いなおすべき問題である。書評誌『読書人』の国内思想戦の追跡は、そのための素材の1つを提供せんとする書評誌の書評の試みであった。

- *本文中の註記に際し、雑誌の引用は1号3～4頁であれば1：3-4と表記し、適宜雑誌名を省略している。漢数字はローマ数字、旧字体は新字体に適宜改めている。
- *本誌第55巻第3・4号掲載の「書評誌『読書人』の国内思想戦——1940年代前半日本の言論空間研究(3・完)」p.45の「総神話の脆さ」は「総親和の脆さ」、p.50の「1944年後半」は「1944年前半」の誤りであり、記して訂正する。

参考文献

- 植村和秀 「書評誌『読書人』の国内思想戦——1940年代前半日本の言論空間研究(1)」『産大法学』第55巻第1号(2021年4月)、「同(2)」第55巻第2号(2021年7月)、「同(3・完)」第55巻第3・4号(2022年1月)
- 井出彰 『書評紙と共に歩んだ50年』 論創社、2012年。
- 植田康夫 『『週刊読書人』と戦後知識人』 論創社、2015年。

佐藤春夫 『定本佐藤春夫全集』第25巻、臨川書店、2000年。(佐藤25と略記)

下島連 『遍歴——歴史と文学の間』南窓社、1985年。

岩出貞夫編 『東京堂の八十五年』東京堂、1976年。(東京堂85と略記)

宮守正雄 『昭和激動期の出版編集者——それぞれの航跡を見つめて』中央大学出版部、2005年。

若木奈津美 「〈文学的抵抗〉の一掃結——中島健蔵の昭和10年代(2)」『法政大学大学院紀要』第58号(2007年3月)。